

314) まよ ざけ
迷い酒

あなころは苦しみを 分かち合う親友がいた
人生に挫折して 生き甲斐をなくした日
新宿の路地裏で 焼酎を傾けて
すぎてゆく青春の ほろ苦さ味わった

あなころは喜びを 分かち合う親友がいた
卒業にめどが付き 就職も決まった日
原宿のカフェバーで 祝杯を重ねては
人生の区切り目を それぞれに感じてた

あなころの親友は 幸せに閉じ込めり
おれひとり人生を ためらって生きている
悲しみも苦しきも 若き日の迷い酒
あなころの思い出も だんだんと遠くなる

苦しきを分かち合う あなころの親友もなく
つまらない誤解から 恋人と別れた日
青山のスナックで ただひとり酒をのみ
生きてゆく空しさを しみじみと噛みしめた

ひとときの喜びも ひとときの悲しみも
すべてみな若き日の なつかしき迷い酒